私の20世紀

渡辺正幸

20世紀が残り少なくなってきた。わが家とそして私自身の世紀として時間が経つのがいとおしい。

ものごころついたのは旧満州で5歳の秋であった。母に手を引かれて幼稚園から帰る途中、大きな黒豚につきまとわれて恐ろしい思いをした記憶がある。放し飼い状態で飼われていた豚は、人糞や生ごみの処分を担当していて重宝がられていたのである。冬になると、近所にあった池は2メートルほどの厚い氷に覆われた。

春には、300坪はあった庭のゆすらんめの垣根の赤い実と濃い緑の葉の対照が、どこまでも蒼い空と乾いた空気の中で美しかった。眩い陽光を浴びて家の傍に立っている当時の私の写真が残されていて、その写真が撮られた背景には記憶がある。何の憂いもないけだるい平和な日々がそこにはあった。

※

私たちの家族は父が勤務していた満州鉄道の社宅に暮らしていた。当時の奉天、現在の瀋陽の町である。しかし、初夏になると雰囲気は急変する。社宅街は匪賊の話でもちきりになり、夕方になると男は手分けして歩哨に立った。翌朝の話題は匪賊に襲われた個所とそこでどんな犠牲が出たかであった。そのころになって、中国人の使用人の態度が粗野になって命令を聞かなくなった、と母が語っていた。日本人と中国人の関係が急にとげとげしくなり、日常のわずかなことが暴力事件になった。私が乗っていた通学バスの前をマウチョ（荷馬車）が横切ったとしてバスの日本人運転手が激昂し、付近にいた日本人と力を合わせて御者を引きずり降ろして縛りあげて電柱に逆さ吊りにした光景を覚えている。その後学校は休校になったが、期を一にして社宅街は色めきたった。母が帯を次々に引き裂いて芯を取り出し、そのゴワゴワした布で大小のリュックサックを作り始めたのである。

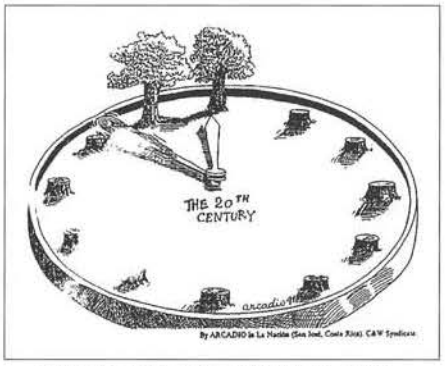
強い陽光、熱く乾いた空気、縁台の上にラジオと炊き上がったばかりの白い米の飯が詰まった釜とその横に刻んだ瓜の漬物を盛った皿がある、という奇妙な光景を覚えている。それは、その日に敗戦を告げる玉音放送があって、それを聞いたあと、当座の衣類や常備薬を詰めた帯芯のザックを背負って逃げ始めたからであった。

※

家族がすべてそろった構成であったわが家はたいへん幸せであった。父・夫が軍人軍属として取られていたために、女手だけで避難行を始めなければならなかった家族が多かったからである。

父と母は前後のザックに家族の着替え・食糧・常備薬・おむつ・飯盒等簡易な食器等を入れて背負い、さらに大きな水筒を肩から下げた。私と妹はわずかな着替えと食品を詰めたザックをそれぞれ背負った。小学校1年の私の肩には生後半年の弟の重みが食い込んだ。

カンカン照りの大陸をすし詰めの無蓋貨車で移動する逃避行は辛かった。厳寒の冬、引揚港への移動の当てがないままに廃屋で過ごすのも辛かった。しかし、最も辛かったのは食べるものがないことであった。食糧不足と衛生状態の悪化ならびに寒さで、老人・病人と乳幼児が死んだ。蒙古や満州奥地から脱出してきた人のなかには零下20～



砂防屋は資源と環境の枯渇を防止できる！
International Herald Tribune

30度の冬に、大豆を入れるカマスの袋しか覆うものを持っていない人があったという。絶望と欠乏そして目前で繰り広げられる国民党軍と八路・ソ連連合軍の戦闘で、路傍の馬と人の死体は日常の風景だった。

※

夏は中国人農民の畑の作物を盗み、冬にはソ連兵が屠殺して遺棄した牛や山羊の骨にこびり付いている僅かな肉片を削ぎ落として野草と混ぜて炊き、岩塩で味をつけて食べた記憶がある。蒋介石の国民党軍とそれを追う八路・ソ連軍に挟まれた状態で逃げていたときのことであった。

大人達は手持ちの金品を小出しにしながら、中国人の鉄道員から貨車と機関車を調達して、少しでも引揚港に近づこうとしたらしい。しかし、戦闘でレールや鉄橋が爆破されていたり、充分な石炭が入手できなかったりで、移動は困難を極めたようだ。貨車に乗ったままの生活も苦しかった、と母は語っていた。昼間はいつなんどき貨車が動き出すかわからないので降りるわけにいかず、夜間はロシア兵士に感づかれないために声もたてられない状況で、煮炊きする鍋を排泄用に使わざるをえなかったそうだ。むずかる幼児の泣き声をソ連兵士に聞かれたらどうする、と絞め殺すことを強要されたとも母は語っていた。

戦争に巻き込まれた時の非戦闘員は弱い。襲いかかる運命は彼我の区別なくむごい。規律を守ることも人間的に行動することも、戦争中は、とくに敗走中には、至難の業だから、だれもが我がちになって弱い者から順に命を落とす。

辛くも生きて乗ることができた引揚船は砲をもぎ取られた旧日本海軍の艦で、たしか「熊野」といった。船は直線の航路をとらず毎日毎日汽笛を鳴らしながら円弧を描きつつ航海した。食糧は支給されたものの、献立はふんどし付きの麦に大豆を混ぜた主食とヒジキの塩汁だけで、それを消化できる人は限られていた。日本を目指す航海の途中で毎日人が亡くなり、死者をまとめて水葬することが日課になっていた。水葬のとき、船は舷側から出した手が泡立つ波に届くほど傾いた。もう戦争はこりごりだ——つぎ敗けたらどこへ逃げればいいのか、と玄海灘に浮かぶ島影を見ながら思ったことを記憶している。

※

中国では関東軍の一部軍人とその家族が敗戦前に早々と帰国していたことをあとで知ったが、そんなものだと妙に合点がいく。理想や志のない国の軍隊はそんなものだ。

軍隊は国を守るというけれど、銃口は、シビリアン・コントロールの伝統を文化として持たない限りは、国民に向けられるものであると知った。かつての東欧諸国をベルリンの壁が崩壊する直前に巡ったときにそれを確認したし、現に多くの開発途上国でそうである。

多数のユダヤ人をナチスのホロコーストから逃したシンドラーや日本人の杉原書記官の話、自分の子供を殺すことができずに捨てることを余儀なくされた多くの日本人の母親、線路脇に包まれて置き去りにされた乳児を苦難のなかで育てた多くの中国人がいたことを長じてから知ったが、それら個々の行為は難しくてできないことでは決してない。だれもがシンドラーや杉原になれる。しか

し、それはしっかりした人間観と価値観、そして自分自身に対する確信がなければできないことだと思う。このことが私の20世紀のレッスンなのだ。

引揚船は大竹港に接岸した。直ちに米軍の双胴船に移乗させられて、上陸するや否や米兵が大量のDDTの白い粉末を頭から浴びせた。

帰国してからの生活は厳しく父も母も夜鍋の連続をしてわれわれを育ててくれた。戦争中から戦後の中国や帰国後の社会や生活のことをもっともっと聞き出したいと思ったが、日本上陸のまさにその日に栄養失調による衰弱で次男を失った悲しみが大きく、母は多くを語らずに世を去った。旧満州で私の肩に食い込むほど重かった弟は、白い粉まみれのままの家族に看取られて白木の箱に納まった。

※

あの「禁じられたあそび」が生まれたバルカンで再び戦火が燃えさかっている。多くの避難民が飢えて雪の中をさまよう苦難が繰り返されている。戦闘や苦難の詳細が茶の間に伝えられる今日、あいまいな隠し立ての多い戦争が許されるわけがない。戦争は次第にやりにくくなっているが、逆に始まりやすくもなっている。

敗戦のあと、庶民は一様に東洋のスイスを目指そうと思い、戦争は終わった——戦争はもうしないという気持ちと、心の中に平和の砦を築くというユネスコの憲章、そして日本国憲法9条の理想は完全に一致していた。理想を追いつつ現実の問題に対処する英知を20世紀の末になってわれわれは失いつつあるのではないかと危惧する。現実の問題に対処するための原則は、“戦争を紛争解決の手段にしない”ことだ。

戦争が始まりやすくなっているとの危惧は、人口増加、その結果としての資源の需要増、資源と環境の限界、社会の中の較差の拡大等が原因である。資源をより効率的に使いより多くの人の需要を満たすという命題に関連する問題の解決を、資源の浪費と破壊以外の何ものでもない戦争に求めるのは完全な矛盾である。相手が見境なく戦力を振りかざせば、受けて立たざるを得ないではないかという考え方もあろう。しかしそれでも“戦争は紛争解決の手段としては時代遅れ”なのである。戦争を紛争解決の手段として認めることになれば、日本にも人類にも未来はない。

※

コソボをめぐる戦争の本質は、上に述べたような社会の矛盾を“あいつのせいだ”として民族の問題にすりかえて魔女狩的に憎悪を煽ったことにある。憎悪を煽るという古典的な戦術で人が動くほどに人類の社会は成熟度が低い、というのも残念ながら現実である。

この点についてはアジアも例外ではないだろう。上に挙げた問題に加えて、貧困・貧富の著しい較差・職なし人口の都市集中といった傾向が顕著になるにもかかわらず、それらを解決しようとする政治家のイニシアティブが極めて貧しいからである。あるいは努力がされていても問題が深刻化するのに追いつかないからである。問題を民族的な憎悪にすりかえて迫る手法には日本の立場は強いとはいえない。

※

世に「金持ち喧嘩せず」ということがあり、筆者は真実だと考えている。全員を金持ちにするには資源の制約もあることから無理だとしても、較差を縮めることは可能である。その可能性は、較差を大きくしようとする力を削減することでより高まる。災害が人の努力や愛を無にし“神も仏もあるものか”という人倫の荒廃を招くという真理は、三浦綾子の「泥流地帯」で活写されている。収穫が乏しく仕事がなく娘を身売りさせるところまで荒んだ社会を、農村匡救事業で“食わせていく”ことによって支えた歴史があり、河川・砂防の事業がその中核として役立ったという事実がある。コストのかからない防災手段とそれを用いた国際協力——なかんずく深刻化する侵食・土砂災害対策——が優れた平和戦略になりうる。

砂防屋は眼を大きく開いて世界と人の生きざまを見よう。砂防技術と事業をとおして世界に貢献する道はいくらでもあることがわかるだろう。このように考えることで21世紀は開けてくる。

（元建設省土木研究所砂防部長）